

海外の畜産物の需給動向

牛肉

米 国

日本、韓国、中国の3カ国が輸出をけん引

中国向け輸出の増加が顕著

米国農務省経済調査局(USDA/ERS)の「Livestock and Meat International Trade Data」によると、2021年9月の牛肉輸出量は、13万971トン(前年同月比20.9%増)と引き続き好調に推移した(表)。

輸出先別に見ると、輸出量第1位の日本向けは3万1430トン(同10.3%増)、同2位の韓国向けは2万9284トン(同9.9%増)と、いずれも前年をかなりの程度上回った。米国食肉輸出連合会(USMEF)によると、両国向けは冷蔵牛肉が大きく伸びて

おり、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響によるレストランなど外食産業への規制が緩和されたことで、引き続き高い輸出が期待されるとしている。同3位の中国向けは、米中経済貿易協定の第一段階合意以降の米国産牛肉に対する高い需要を背景に2万3738トン(同約4.1倍)と、9月の輸出増加の最大の要因となった。これら上位3カ国で輸出量全体の6割以上を占めた。そのほか、メキシコ向けは、1万381トン(同14.1%増)と経済活動の再開に伴い輸入需要は回復傾向にあるが、COVID-19流行前の水準には及んでいない。

表 米国の輸出先別牛肉輸出量の推移

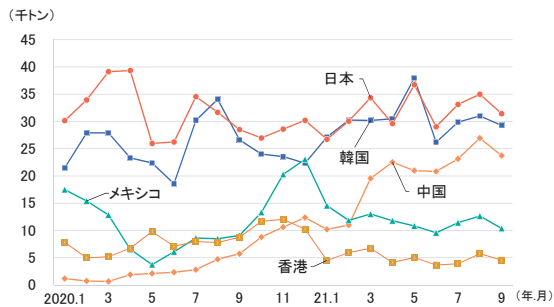
(単位：トン)

	2020年 9月	2021年 9月	前年同月比 (増減率)	シェア	2021年	前年同期比
					(1~9月)	(増減率)
日本	28,498	31,430	10.3%	24.0%	286,060	▲1.2%
韓国	26,635	29,284	9.9%	22.4%	272,388	17.2%
中国	5,747	23,738	313.1% (約4.1倍)	18.1%	178,930	704.4% (約8.0倍)
メキシコ	9,096	10,381	14.1%	7.9%	106,123	20.1%
カナダ	10,474	10,064	▲3.9%	7.7%	92,805	▲7.0%
台湾	8,166	7,438	▲8.9%	5.7%	66,192	▲2.5%
香港	8,762	4,565	▲47.9%	3.5%	44,233	▲33.2%
インドネシア	1,279	1,903	48.8%	1.5%	16,075	42.5%
チリ	587	1,247	112.5%	1.0%	9,028	34.4%
その他	9,108	10,922	19.9%	8.3%	98,258	19.0%
合計	108,351	130,971	20.9%	100.0%	1,170,092	21.0%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」
注：枝肉重量ベース。

一方、香港向けは、4565トン（前年同月比47.9%減）と大幅に減少したが、現地報道によると、香港経由で中国本土に輸入されていた製品の一部が、直接中国に向けられたのは明らかとされている（図1）。

図1 主要輸出先別牛肉輸出量の推移



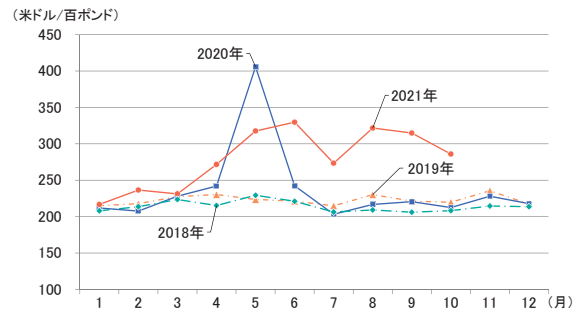
資料：USDA [Livestock and Meat International Trade Data]
注：枝肉重量ベース。

価格は引き続き堅調に推移も、消費への影響を懸念

USDA/ERSの「Livestock and Meat Domestic Data」によると、今年に入ってから国内の牛肉需要を反映して、21年10月の牛肉卸売価格は、前年同月比34.6%高の100ポンド当たり285.97米ドル（1キログラム当たり725円：1米ドル＝115円^注）と引き続き前年同月を大幅に上回って推移した（図2）。また、21年初頭からの牛群縮小による供給頭数の減少見込みもある中で、牛肉処理業者の需要が引き続き堅調なことから、同年10月の肥育牛価格は、前年同月比17.4%高の100ポンド当たり124.91米ドル（同317円）と高値で推移した（図3）。

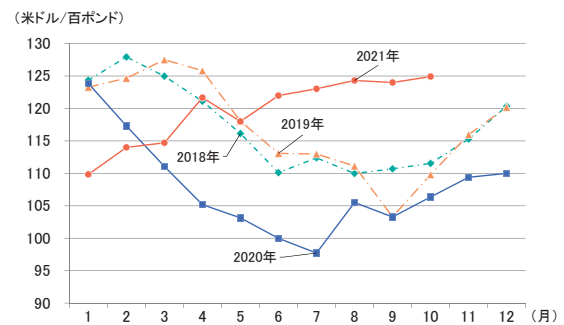
USDAは、育成牛の冬の放牧環境が改善見込みであることや高水準にある肥育牛価格

図2 牛肉卸売価格の推移



資料：USDA [Livestock & Meat Domestic Data]
注1：カットアウトバリュー（各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格）。
注2：チョイス級、600～900ポンド。

図3 肥育牛価格の推移



資料：USDA [Livestock & Meat Domestic Data]
注：ネブラスカの相対取引価格、チョイス級、去勢。

を要因に、21年第4四半期の肥育もと牛価格、肥育牛価格は、いずれも堅調に推移すると予測している。

一方、牛肉価格の急騰により、消費者は外食の機会を減らし、家庭で調理する傾向が見られ、需要が期待された外食産業への支出が伸び悩んでいる。現地報道によると、消費者が価格高騰から牛肉製品の購入機会を減らすのではないかと懸念する声もあり、今後の価格動向が注目されている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2021年11月末TTS相場。

（調査情報部 上村 照子）

牛群再構築は2022年まで継続と予想

2021年の牛の需給は引き続きひっ迫

豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）は、最新の牛肉生産量などの見通しとなる「Industry projections 2021–November update」を公表した（表1）。

これによると、2021年の牛飼養頭数は、ラニーニャ現象の発生（後述）による安定的な降雨を背景に、引き続き良好な放牧環境が見込まれ、生産者における保留意欲の継続が見込まれることから、2636万1000頭（前年比7.1%増）とかなりの程度増加し、23年には2864万3000頭に達すると予測している。

一方、21年のと畜頭数は、継続している降雨の状況を踏まえた牛群再構築の流れを受けて、前回見通しから下方修正され600万頭（同16.3%減）と大幅に減少し、過去36年間で最低水準になると見込んでいる。また、同年の1頭当たり枝肉重量は308キ

ログラム（同4.5%増）と見込んでおり、と畜頭数の減少を一部相殺する形で、牛肉生産量は184万8000トン（同12.5%減）とかなり大きく減少すると見込んでいる。その後は牛飼養頭数の増加から、23年のと畜頭数は745万頭、牛肉生産量は230万8000トンにそれぞれ回復すると予測している。

21年の牛肉輸出量は、生産量の減少に伴い91万8000トン（同11.6%減）とかなり大きく減少すると見込んでいるが、23年は生産量の回復に伴い、114万トンに回復すると予測している。

生体牛輸出頭数については、豪州の牛価格高騰により主要輸出先であるベトナムなどの海外の輸入業者が、ブラジルなどの代替市場からより安価な生体牛を輸入していることもあり、21年は70万5000頭（同30.2%減）と大幅な減少を見込んでいる。しかし、牛群再構築の進展により、今後2年間で徐々に牛価格が下落することが見込まれるため、23年には83万頭に回復すると予

表1 牛肉生産量などの見通し

項目	2019年	2020年	2021年	前年比 (増減率)	2022年	2023年
			(今回見込値)		(今回予測値)	(今回予測値)
牛飼養頭数(千頭)	26,187	24,621	26,361	7.1%	27,821	28,643
成牛と畜頭数(千頭)	8,482	7,171	6,000	▲16.3%	6,650	7,450
牛肉生産量(千トン)	2,405	2,111	1,848	▲12.5%	2,069	2,308
1頭当たり枝肉重量 (キログラム)	283.6	294.8	308.0	4.5%	311.1	309.8
牛肉輸出量(千トン)	1,229	1,039	918	▲11.6%	1,060	1,140
生体牛輸出頭数(千頭)	1,304	1,010	705	▲30.2%	750	830

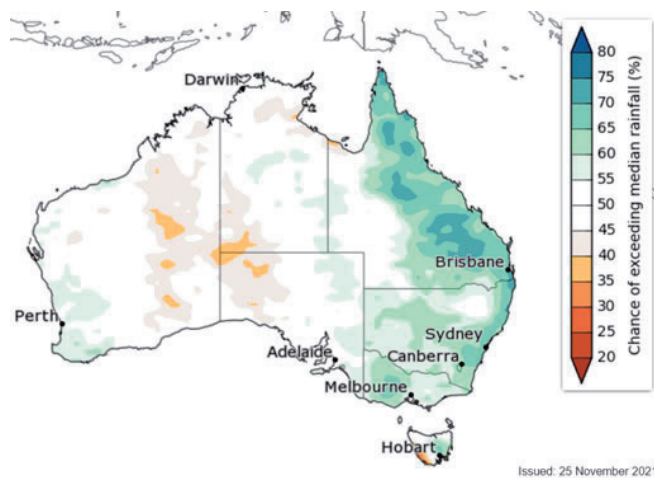
資料：MLA「Industry projections 2021–November update」
 注1：牛肉生産量は枝肉重量ベース。牛肉輸出量は船積重量ベース。
 注2：子牛および子牛肉を除く。
 注3：2021年は見込値。22年および23年は予測値。

測している。

MLAは見通しの中で、豪州では牛の供給不足に加え、労働力不足、輸送コストや豪ドルの高騰など、国内の加工業者や輸出業者をめぐる情勢は、大変厳しいものとなっているとしている。また、豪州気象庁（BOM）が、

太平洋で2年連続となるラニーニャ現象が発生していることを背景に、豪州北部および東部のほとんどの地域で夏季（12月～翌2月）の降雨量が年平均値を上回ると予測していることから（図1）、牛群再構築が2022年まで継続されると予想している。

図1 夏季（12月～翌2月）の豪州における降雨予想図



資料：BOMホームページから引用

肉牛生体取引価格は1100豪セントを突破

肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、11月22日に過去最高となる1キログラム当たり1105豪セント（917円：1豪ドル＝83円^{（注1）}）を記録した（図2）。

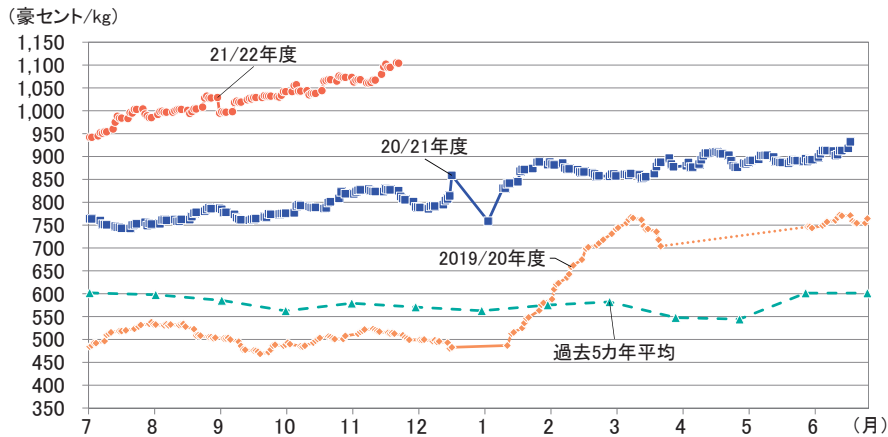
（注1）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2021年11月末TTS相場。）

現地報道によると、今般の高騰要因には牛群再構築に伴う牛の需給のひっ迫などが挙げられており、肉牛価格の高値基調は今後も継続するとしている。

他方で、豪州フィードロット協会（ALFA）とMLAが11月19日に公表した全国フィードロット飼養頭数調査の結果（2021年7～9月期）では、フィードロットの稼働率が77.3%と過去5年間平均稼働率である76.5%を超える結果となった。ALFAは、牛群の再構築が進み、牛の供給がひっ迫しているにもかかわらず、稼働率が75%を上回っていることは、フィードロットでの需要が安定していることの裏付けであるとしている^{（注2）}。

（注2）海外情報「フィードロット飼養頭数は15期連続で100万頭超（豪州）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003107.html）を参照されたい。

図2 EYCI価格の推移



資料：MLA

注1：年度は7月～翌6月。

注2：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部3州（クィーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。

注3：2020年3月26日～6月1日の間は、新型コロナウイルス感染症の影響でEYCI価格の集計を実施していない。

韓国向けが増加もセーフガード数量に迫る

豪州農業・水・環境省（DAWE）によると、2021年10月の牛肉輸出量は7万4333トン（前年同月比8.6%減）

とかなりの程度減少した（表2）。一方、同年1～10月の累計（累計期間は以下同じ）では73万4908トン（前年同期比16.0%減）と大幅に減少している。

輸出先別に見ると、最大の輸出先である日本向けは1万8769トン（前年同月比

表2 輸出先別牛肉輸出量の推移

(単位：トン)

	2020年 10月	2021年 10月	前年同月比 (増減率)	2021年 (1～10月)	
				前年同期比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
日本	22,371	18,769	▲ 16.1%	196,760	▲ 11.1%
韓国	13,829	14,920	7.9%	131,635	2.9%
米国	14,486	13,587	▲ 6.2%	121,494	▲ 35.0%
中国	12,640	12,619	▲ 0.2%	121,395	▲ 27.9%
東南アジア	7,350	6,674	▲ 9.2%	81,747	0.6%
中東	3,362	2,273	▲ 32.4%	25,873	8.7%
EU	658	530	▲ 19.4%	6,547	▲ 11.1%
その他	6,619	4,962	▲ 25.0%	45,837	▲ 9.7%
輸出量合計	81,314	74,333	▲ 8.6%	734,908	▲ 16.0%

資料：DAWE

注1：船積重量ベース。

注2：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。

注3：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラース・アル＝ハイマ）の合計。

16.1%減)と大幅に減少し、累計でも19万6760トン(前年同期比11.1%減)と、前月に比べ減少率が拡大した。

続く韓国向けは、1万4920トン(前年同月比7.9%増)とかなりの程度増加し、累計では13万1635トン(前年同期比2.9%増)となった。なお、累計輸出量は豪韓FTAに基づく2021年のセーフガード発動数量(17万7569トン)に近づいており、セーフガードが発動された場合、豪州産牛肉の関税は残りの暦年で18.6%から30%に引き上げられるため、今後の韓

国向け輸出の動向が注目される。

米国向けは、1万3587トン(前年同月比6.2%減)とかなりの程度減少した。累計でも12万1494トン(前年同期比35%減)と大幅に減少し、輸出先として第3位に後退した。MLAや現地報道によると、米国での干ばつにより同国の牛肉生産量が多いことに加え、豪州国内の需給ひっ迫などを背景にした豪州産牛ひき肉の輸出価格の高騰が要因とされている。

(調査情報部 国際調査グループ)

中国

堅調な需要から生産量、輸入量ともに増加

1～9月の牛肉生産量は前年同期比3.9%増

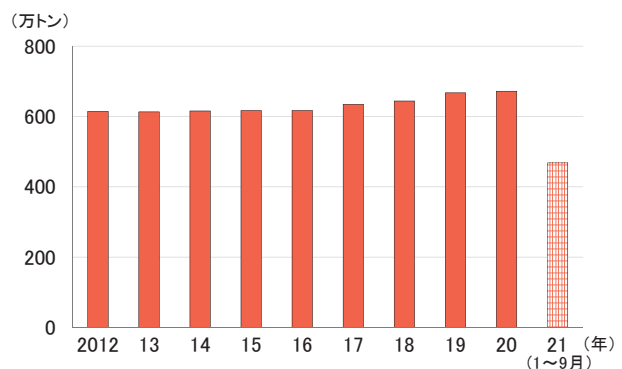
中国国家统计局によると、2021年1～9月の牛肉生産量は、前年同期比3.9%増の468万トンとなった(図1)。また、中国農業農村部は、11月4日に実施した記者会見において、21年の牛肉を含めた肉類全般の生産量について、過去最高を記録する可能性があるとしている。

牛肉生産量が増加している要因について現地専門家は、国民の所得向上や嗜好の変化などによる需要増加にけん引されたものとしており、政策的に肉牛生産が推進されていることも、国内の牛肉生産の拡大につながっているとしている。なお、中国農業農村部は21年4月、25年までに牛肉および羊肉の自給率(注1)を85%程度にすることなどを盛り込んだ「牛肉と羊肉の生産発展を推進する5カ年行動方案」を発表し、目標達成に向け、

優良品種の導入や良質な飼料の供給拡大などを同方案における「重点任務」と位置付け、補助金を手当てするなどの施策を実施している。

(注1) 現状の牛肉の自給率について公表された数値はないが、2021年4月に公表された「中国農業展望報告(2021-2030)」で示された20年の生産量(672万トン)と消費量(884万トン)から試算すると、同年の牛肉自給率は76%程度と推定される。また、現地専門家からは、おおむね6～7割程度との意見も聞かれる。

図1 牛肉生産量の推移



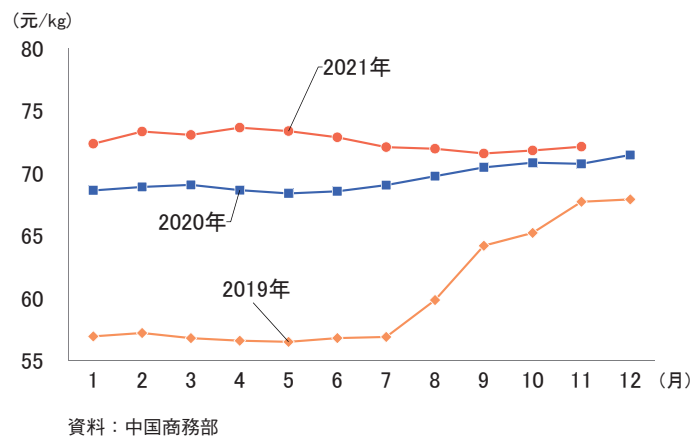
資料：中国国家统计局

増産傾向にある中、牛肉価格は高値で推移

牛肉価格は、2019年後半以降、高値安定で推移している。同価格は21年4月以降、一時的にごくわずかな下落傾向も見られたものの、9月に入り再び上昇傾向にある(図2)。このことについて現地専門家は、豚肉価格の下落により一時的に牛肉消費は緩んだもの

の、夏期休暇明けの学校再開による給食需要や、秋季における気温低下に伴う食肉需要の回復などから牛肉の引き合いが再び強くなったことを挙げている。また、今後の牛肉価格の動向については、需要期となる冬季を迎えることや、依然として飼料価格の高騰が続いていることなどから、上昇傾向は継続すると予測している。

図2 牛肉卸売価格の推移



牛肉輸入量は引き続き増加

中国では生産拡大を推し進めているものの、国内の供給不足を満たすため、牛肉輸入量は増加傾向にある。

2021年1～10月の冷凍牛肉の輸入量は、前年同期比12.0%増の190万6921トンとなった(表1)。冷凍牛肉輸入量に占める国別割合は、最大の輸入先であるブラジルが39.7%(前年同期比0.7ポイント減)と第2位のアルゼンチンの20.4%(同2.4ポイント減)を大きく引き離しているが、9月にブラジルで非定型BSE(牛海綿状脳症)が発生したことを受け、同国から中国への牛肉輸出が一時停止されたため、10月単月での同国からの輸入量は

7万4221トン(前年同月比10.9%減)とかなりの程度減少した。

このような中で中国政府は12月15日、30カ月齢以下の骨なし牛肉に限りブラジルからの輸入再開を公表したため、今後、同国からの輸入量は回復に向かうものとみられる。

また、アルゼンチンは、自国内の牛肉価格対策として21年5月から牛肉の輸出制限措置を講じてきたが、10月に一部牛肉の中国向け輸出を同制限の対象から除外した(注2)。これにより、7月以降、前年同月比で1～4割弱減少していた同国からの冷凍牛肉の輸入量が、10月は3万8829トン(同10.2%増)と増加に転じた。その他、21年に入ってから継続的に豪州からの輸入量が減少する一方で、21年1～10月の米

国からの輸入量は前年同期比で約7.5倍と大幅に増加している。

(注2) 海外情報「アルゼンチン、牛肉輸出制限措置を追加緩和」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003065.html)を参照されたい。

また、絶対量は少ないものの、同期の冷蔵牛肉の輸入量は中国国内の需要増加を受け、前年同期比0.8%増の3万5511トンとなった(表2)。輸入先別に見ると、冷凍牛肉と同様、豪州からの輸入が減少している一

方、米国やウルグアイからの輸入は激増している。また、ロシアからの輸入増加やイタリアからの輸入解禁など、輸入先の多角化も積極的に行われている。現地専門家によると、現状の中豪間の貿易摩擦に係るこう着状態は長期化の様相を呈しており、今後数年間はこのような状況が継続する可能性もあるとみられることから、豪州からの牛肉輸入量はさらに減少する一方、その他の国からの牛肉輸入の増加が見込まれるとしている。

表1 冷凍牛肉の輸入先別輸入量の推移

(単位：万トン)

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	前年同期比 (増減率)
					(1~10月)	
ブラジル	19.8	32.3	40.0	84.8	75.8	10.0%
アルゼンチン	8.6	18.0	37.6	48.1	39.0	0.1%
ウルグアイ	19.6	21.9	28.6	22.8	26.8	43.3%
豪州	11.0	16.1	28.0	22.0	10.7	▲46.1%
ニュージーランド	7.9	10.8	20.5	16.1	16.5	19.4%
米国	0.2	0.7	0.9	2.5	10.7	654.7% (約7.5倍)
その他	1.8	2.7	6.7	10.6	11.2	28.6%
合計	68.9	102.3	162.2	207.0	190.7	12.0%

資料：「Global Trade Atlas」

注1：製品重量ベース。

注2：HSコード0202。

表2 冷蔵牛肉の輸入先別輸入量の推移

(単位：トン)

	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	前年同期比 (増減率)
					(1~10月)	
豪州	5,912	12,575	27,517	33,366	16,160	▲38.3%
ニュージーランド	379	3,172	9,229	8,937	7,023	7.9%
米国	268	236	856	3,535	7,854	473.7% (約5.7倍)
アルゼンチン	—	—	67	1,498	2,205	193.2% (約2.9倍)
ウルグアイ	—	—	77	1,312	2,122	513.3% (約6.1倍)
その他	—	6	106	88	149	122.4% (約2.2倍)
合計	6,558	15,990	37,852	48,737	35,511	0.8%

資料：「Global Trade Atlas」

注1：製品重量ベース。

注2：HSコード0201。

(調査情報部 阿南 小有里)

豚肉

E U

豚枝肉卸売価格は、低水準で推移

8月の豚肉生産量は前年同月比3.0%増

欧州委員会によると、2021年8月の豚肉生産量（EU27カ国）は、1頭当たり枝肉重量が前年同月比0.6%減の91.7キログラムとなったものの、と畜頭数が同3.5%増の2049万頭となったことから、同3.0%増の187万8050トンとなった（図1、表）。また、1～8月の累計では、前年同期をやや上回る1548万トン（前年同期比3.0%増）となった。

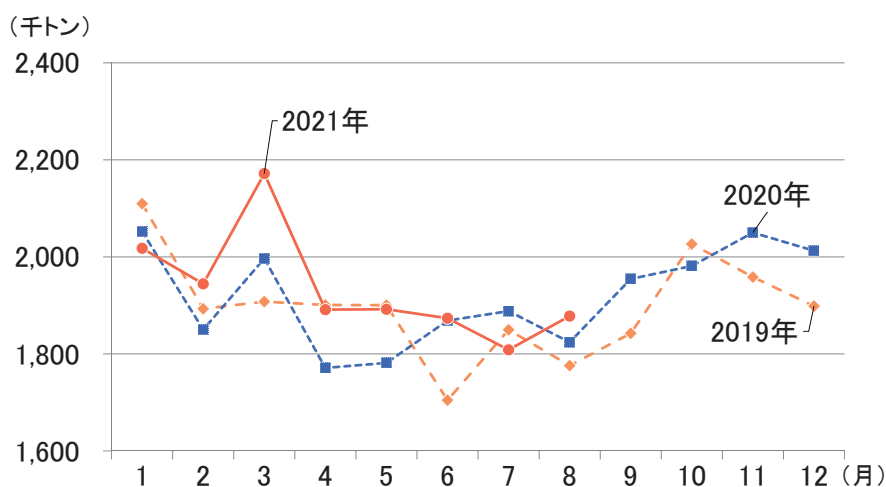
同月の生産量を主要生産国別に見ると、EUの豚肉輸出をけん引するスペイン（前年同月比10.6%増）、デンマーク（同12.4%増）、オランダ（同5.9%増）などが前年

同月を上回った。一方で、ドイツは、昨年9月に野生イノシシでアフリカ豚熱の発生が確認されて以来、主要輸出先であった中国などアジア諸国を中心に輸入停止措置が続いていることから、同5.0%減の40万1000トンとなった。

なお、ドイツでは本年7月に続き、11月15日、同国北東端に位置するメクレンブルク＝フォアポンメルン州で新たに家畜豚でのアフリカ豚熱発生が確認され^(注1)、その後、同州では11月25日に野生イノシシでもアフリカ豚熱発生が確認されるなど養豚への影響が懸念されている。

(注1) 海外情報「新たな州で家畜豚のアフリカ豚熱発生（ドイツ）」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003096.html)を参照されたい。

図1 月別豚肉生産量の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」
注1：直近月は速報値。
注2：枝肉重量ベース。

表 主要生産国別豚肉生産量の推移

(単位：千トン)

	2020年 8月	2021年 8月	2021年 (1~8月)	
			前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
ドイツ	422	401	▲ 5.0%	▲ 2.0%
スペイン	362	400	10.6%	3.6%
フランス	176	184	4.5%	0.4%
デンマーク	135	152	12.4%	11.2%
ポーランド	166	148	▲ 11.1%	2.9%
オランダ	130	138	5.9%	6.9%
イタリア	99	105	5.3%	7.2%
その他	333	351	5.3%	3.9%
合計	1,824	1,878	3.0%	3.0%

資料：欧州委員会「Eurostat」
注：枝肉重量ベース。

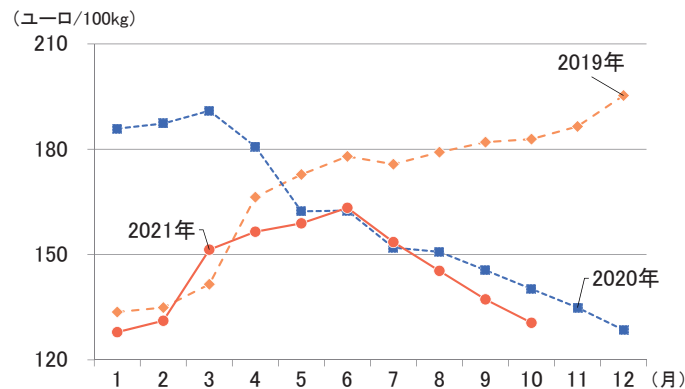
10月の豚枝肉卸売価格は、前年同月比6.9%安

欧州委員会によると、2021年10月の豚枝肉卸売価格（EU27カ国）は、前年同月比6.9%安の100キログラム当たり130.6ユーロ（1万6966円：1ユーロ＝129.91円^(注2)）となった（図2）。同価格は、19年は中国におけるアフリカ豚熱の流行による同国向け輸出需要の増加などに伴い、上昇基調で推移していたものの、20年3月のCOVID-19拡大による需要減退や同年9月のドイツでの野生イノシシ

におけるアフリカ豚熱の発生を受けて下落傾向で推移していた。その後、COVID-19に関する規制緩和に伴う外食需要などの回復もあり、21年1月以降は上昇基調にあった。しかし、中国国内の豚肉生産の回復に伴い同国向けの輸出量が大幅に減少すると、アジア諸国から輸入停止措置が続いているドイツ産豚肉に加えて輸出先を失った輸出国の豚肉がEU域内で滞留したことなどから6月以降は下落傾向となっている。

(注2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2021年11月末TTS相場。

図2 豚枝肉卸売価格の月別推移



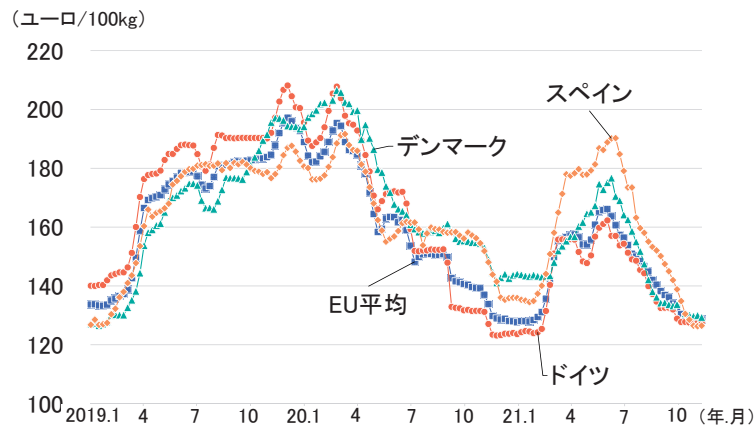
資料：欧州委員会「Meat Market Observatory-Pigmeat」
注：EU参考価格（CLASS E）。

同価格の推移を週ごとに見ると、6月14日の週を境に下落に転じ、10月18日の週に同130ユーロを下回り、その後は低い水準で推移し、直近の11月15日の週は前週比0.1%安の同128.58ユーロ（1万6704円）となった（図3）。

このような状況を受けて、11月には加盟国から欧州委員会に対し、同価格は過去10年間で最も低い水準にあり、養豚生産者の離農を引き起こしかねないことから、共通農業

政策による豚肉の民間在庫補助を含む緊急支援を求める要請が行われた。しかしながら、欧州委員会は価格下落の現状を認識しているとしつつも、民間在庫補助などの市場措置を取ることは適切ではないとし、この要請を拒否している。また、欧州でCOVID-19の再拡大によるロックダウンなどの規制が懸念されていることから、今後の同価格の推移が注目されている。

図3 豚枝肉卸売価格の週別推移



資料：欧州委員会「Meat Market Observatory-Pigmeat」
 注1：EU参考価格（CLASS E）。
 注2：デンマークの2020年2月17日および2021年10月11日はデータなし。

（調査情報部 小林 智也）

鶏 肉

米 国

鶏肉輸出量、メキシコ向けなど引き続き好調に推移

1～9月の鶏肉生産量、前年同期比
0.5%増

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）に

よると、2021年1～9月の鶏肉生産量は、1528万8000トン（前年同期比0.5%増）と引き続き前年を上回るペースを維持している（表1）。同期間の処理羽数は69億

2300万羽（同0.5%減）となった一方で、生体重量が1羽当たり2.93キログラム（同0.8%増）となったことが生産を押し上げる形となった。

処理羽数が前年同期を下回ったのは、21年1、2月の減少による影響が大きい（図1）。1月は食鳥処理場の稼働日数が前年同月よりも2日少なかったことから、処理羽数は前年同月比9.1%減となった。また、2月は、

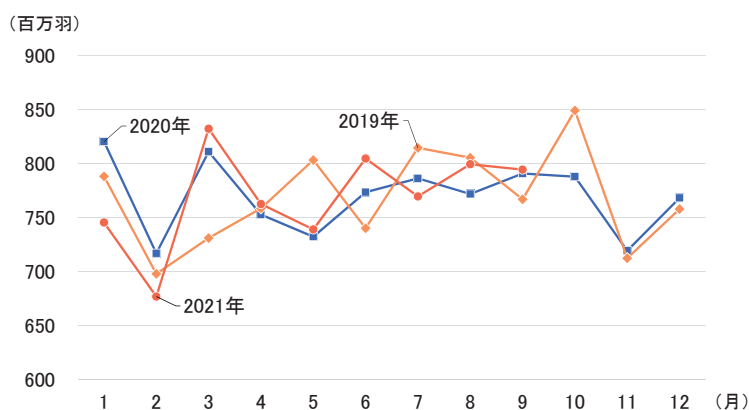
カレンダー日数が少ないことで他の月より減少傾向にあるが、同月中旬にテキサス州などの南部で記録的な寒波が発生し、処理場の稼働率低下などから鶏肉生産に大きな影響が生じた。翌週以降、鶏肉生産の遅れを取り戻すため、処理場は稼働時間を増やしたものの、同月の処理羽数は6億7681万羽（同5.6%減）と前年同月をやや下回った。

表1 鶏肉生産量の推移

	2020年 (1~12月)	前年比 (増減率)	2021年 9月	前年同月比 (増減率)	2021年 (1~9月)	前年同期比 (増減率)
生産量（千トン）	20,223	1.5%	1,781	1.3%	15,288	0.5%
処理羽数（百万羽）	9,230	0.1%	794	0.5%	6,923	▲0.5%
生体重量（キログラム/羽）	2.91	1.4%	2.97	0.8%	2.93	0.8%

資料：USDA「Livestock & Meat Domestic Data」
 注1：連邦食肉検査済みのもの。
 注2：生産量は可食処理ベース（骨付き）。

図1 ブロイラー処理羽数の推移



資料：USDA「Livestock & Meat Domestic Data」

1～9月の鶏肉輸出量、前年同期比4.4%増

USDA/ERSによると、2021年1～9月の米国の鶏肉輸出量は、256万トン（前年同期比4.4%増）と前年同期をやや上

回った（表2）。

USDAによると、最大の輸出先であるメキシコ向けは、同国で主に加工用に仕向けられる輸入鶏肉需要の増加などから、前年同期比24.4%増となった。フィリピン向けは、アフリカ豚熱の影響に伴う豚肉からの代替需

要から、同約2.4倍と大幅に増加した。一方、中国向けは、前年の輸出が記録的な水準であったことに加え、現地の鶏肉価格が下落したことなどから、同35.7%減となった。

中国向け鶏肉輸出が減少する中、USDA/ERSの統計には含まれない同国向けもみじ（鶏足）の輸出量は好調に推移している（図2）。もみじは、米国ではレンダリング用以外、

ほとんど需要がない一方で、中国では加工や外食など幅広い用途で需要があり、米国産もみじはサイズや品質などの面で高く評価されている。米国での鳥インフルエンザ発生により、15年から中国向けの輸出が停止されていたが、19年11月に輸出が再開されて以降、増加基調となっている。

表2 輸出先別鶏肉輸出量の推移

（単位：千トン）

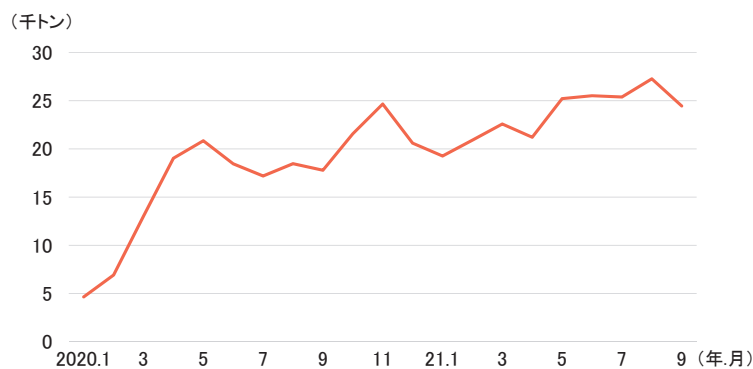
	2021年 9月	前年同月比 (増減率)	2021年 (1~9月)	前年同期比 (増減率)	シェア (%)
メキシコ	63	3.6%	621	24.4%	24.2%
キューバ	18	18.5%	227	77.2%	8.9%
フィリピン	9	▲7.9%	129	136.7% (約2.4倍)	5.1%
中国	13	▲58.7%	126	▲35.7%	4.9%
台湾	12	▲0.5%	118	▲37.1%	4.6%
カナダ	12	▲23.0%	111	▲3.3%	4.3%
グアテマラ	11	25.4%	106	25.2%	4.1%
アンゴラ	13	9.9%	94	36.3%	3.7%
ベトナム	7	▲33.8%	83	▲36.9%	3.2%
その他	115	8.6%	946	▲4.4%	37.0%
合計	271	▲3.2%	2,560	4.4%	100.0%

資料：USDA [Livestock and Meat International Trade Data]

注1：製品重量ベース。

注2：もみじ（鶏足）を除く。

図2 冷凍もみじの中国向け輸出量の推移



資料：[Global Trade Atlas]

注1：製品重量ベース。

注2：HSコード020714004。

（調査情報部 河村 侑紀）

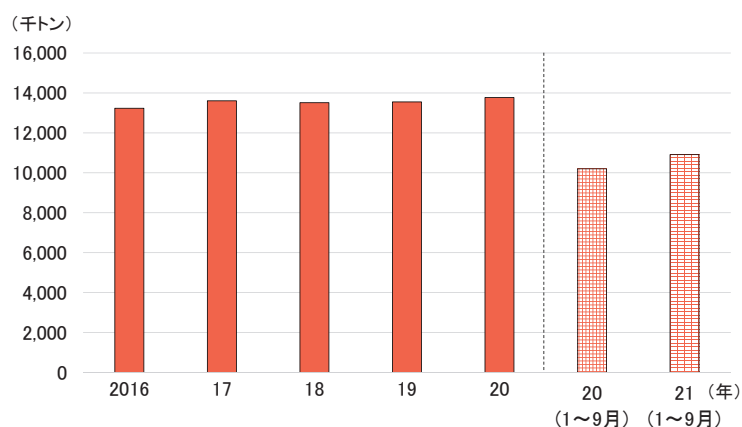
鶏肉輸出量は増加傾向が加速

堅調な国内外の需要を背景に増産傾向で推移

ブラジル地理統計院（IBGE）によると、2020年の鶏肉生産量は、1377万トン（前年比1.6%増）と前年をわずかに上回った（図1）。21年1～9月の累計（速報値）

では、国内外の需要が堅調であることから、1091万トン（前年同期比7.0%増）と前年同期をかなりの程度上回り、増加傾向で推移している。中でも、本年3月の生産量は132万トンとなり、16年以降の単月生産量としては初めて130万トンを超える高い水準となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：IBGE
注：2021年は速報値。

1～10月の鶏肉輸出量、前年同期比9.1%増

ブラジル経済省貿易事務局（SECEX）によると、2021年1～10月の鶏肉輸出量は、352万5425トン（前年同期比9.1%増）と前年同期をかなりの程度上回った（表）。特に9、10月の鶏肉輸出量はいずれも前年同月を2割以上も上回っており、増加傾向が顕著となっている。鶏肉輸出量は、飼料価格高により生産コストが大幅に上昇しているものの、米ドルに対するレアル安の為替相場を追い風に海外からの堅調な需

要を受けて増加傾向で推移している（図2）。

輸出先別に見ると、最大の中国向けは54万9257トン（同2.5%減）と前年をわずかに下回った（図3）。同国向けは、年初に前年同期を下回っていたが、3月以降は持ち直してきている。日本向けは、35万6795トン（同7.5%増）とサウジアラビアを抜いて第2位となった。日本向け輸出量は月3万トン台で比較的安定していたが、9、10月はそれぞれ4万5000トンを超える水準に増加した。これは、日本にとって主要鶏肉輸入先であるタイからの輸入量が、同国でのCOVID-19の影響による生産

減に伴い減少したためとみられる。また、サウジアラビア向けは31万4400トン（同16.3%減）と大幅に減少した。これは、サウジアラビア食品医薬品庁（SFDA）が21年5月、ブラジルの11鶏肉処理場からの輸入を停止する措置を講じたためである。一方、アラブ首長国連邦向けは、6月以降の輸出量が前年を大幅に上回って推移してい

る。このほか、メキシコ向けも前年同期を大幅に上回っている。これは、同国政府が6月、米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）外の国に対し新たに鶏肉の輸入割当を行い、ブラジルには3万トンを割り当てたためとみられる。なお、新たな輸入割当枠は無税で、骨付きおよび骨なしカット肉に適用される。

表 輸出先別鶏肉輸出量および輸出額の推移

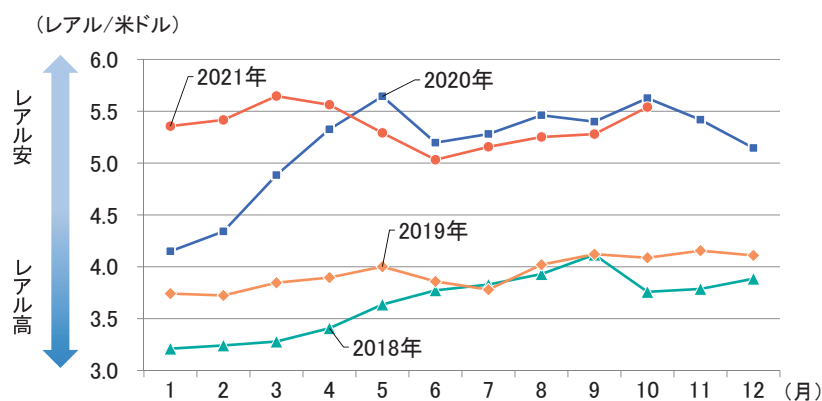
区分	2020年 (1月～10月)			2021年 (1月～10月)			前年同期比 (増減率)		
	輸出量 (トン)	輸出額 (千米ドル)	単価 (米ドル/トン)	輸出量 (トン)	輸出額 (千米ドル)	単価 (米ドル/トン)	輸出量	輸出額	単価
中国	563,590	1,073,716	1,905	549,257	1,084,014	1,974	▲2.5%	1.0%	3.6%
日本	331,988	549,231	1,654	356,795	669,257	1,876	7.5%	21.9%	13.4%
サウジアラビア	375,652	548,620	1,460	314,400	571,017	1,816	▲16.3%	4.1%	24.4%
アラブ首長国連邦	245,341	345,051	1,406	306,616	535,942	1,748	25.0%	55.3%	24.3%
南アフリカ共和国	210,570	94,670	450	245,352	171,250	698	16.5%	80.9%	55.2%
フィリピン	59,799	35,495	594	147,633	134,118	908	146.9%	277.9%	53.1%
メキシコ	13,703	6,535	477	98,876	149,013	1,507	621.6% (約7.2倍)	2,180.2% (約22.8倍)	216.0% (約3.2倍)
イエメン	88,571	106,248	1,200	97,686	150,469	1,540	10.3%	41.6%	28.4%
その他	1,340,799	1,805,674	1,347	1,408,810	2,205,438	1,565	5.1%	22.1%	16.2%
合計	3,230,013	4,565,239	1,413	3,525,425	5,670,519	1,608	9.1%	24.2%	13.8%

資料：SECEX

注1：HSコード0207.11、0207.12、0207.13、0207.14の合計。

注2：製品重量ベース。

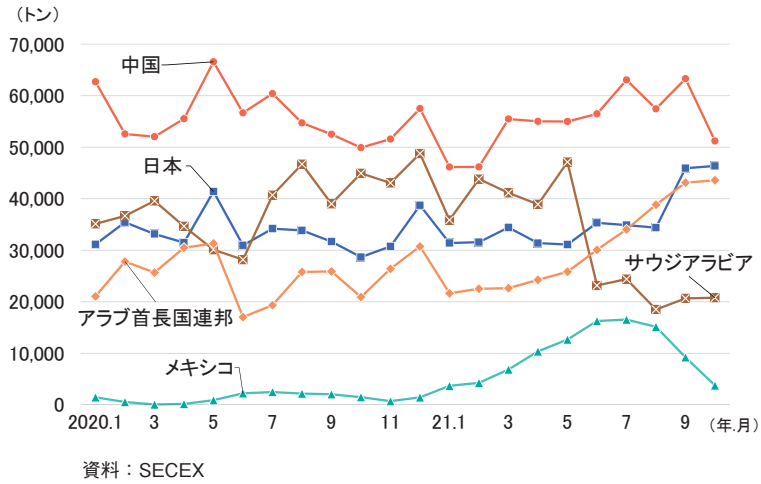
図2 為替相場（米ドルに対するリアル）の推移



資料：三菱UFJリサーチ&コンサルティング「現地参考為替相場」

注：各月の平均Sellingレートの推移。

図3 主要輸出先別鶏肉輸出量の推移



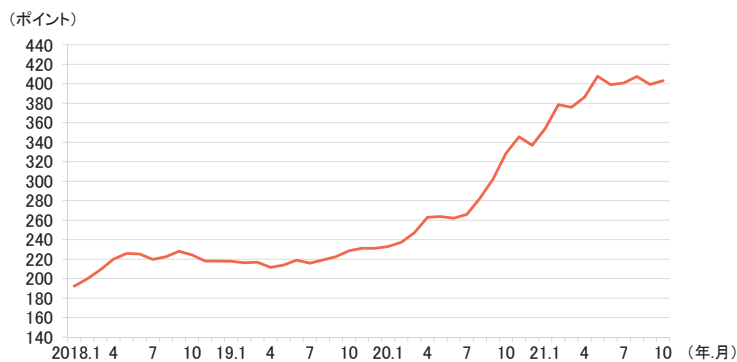
国内のトウモロコシ価格は高水準で推移

ブラジル農牧研究公社（EMBRAPA）養鶏・養豚センター（CIAS）によると、最大の鶏肉生産州であるパラナ州のブロイラー生産コスト指数（2010年1月の生産コストを100とした指数）は、高水準で推移している。同指数は、18年4月から19年9月ごろまで220ポイント前後で推移していたが、その後上昇傾向で推移し、21年5月には400ポイントを超えた。その後は400ポイント前後で推移しており、10月

は前年同月比22.6%高となった（図4）。

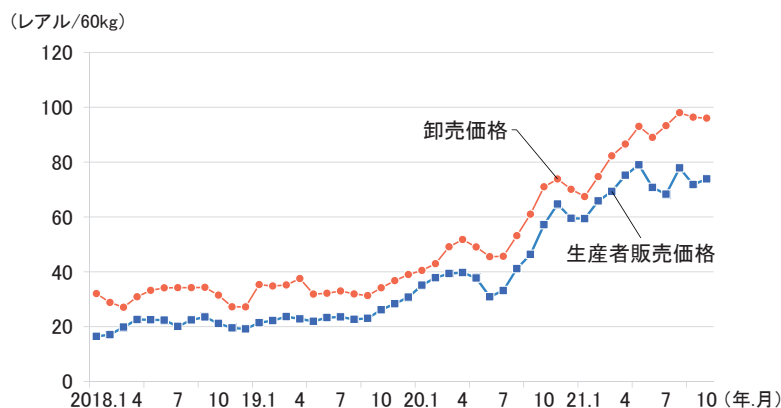
鶏肉生産コストの約7割は飼料費が占めるが、トウモロコシの卸売価格（マットグロソ州）は、19年10月ごろから上昇傾向で推移し、21年10月には、前年同月比35.3%高の60キログラム当たり96.0リアル（1920円、1リアル＝20円）と高水準にある（図5）。これは、国内外からのトウモロコシの需要が堅調であることのほか、当該年度のトウモロコシ生産量が天候の影響などにより大幅に減少したためとみられる。

図4 パラナ州のブロイラー生産コスト指数の推移



資料：ブラジル農牧研究公社（EMBRAPA）
注：2010年1月の生産コストを100ポイントとしている。

図5 マットグロッソン州のトウモロコシ相場の推移



資料：ブラジル国家食糧供給公社 (CONAB)

国内鶏肉価格は記録的高値を維持

サンパウロ大学農学部応用経済研究所 (CEPEA) によると、ブラジルの鶏肉卸売価格 (サンパウロ州、名目価格) は、同国内で COVID-19 が拡大し始めた 2020 年 3~5 月ごろにかけて下落し、1 キログラム当たり 3.8 レアル (84 円) 程度となった。その後は、堅調な需要を背景に上昇傾向で推移している (図 6)。21 年 9 月中旬には同

8.57 レアル (171 円) と統計が開始された 04 年以降の最高値を更新し、その後、やや下落したものの、高水準の状況が続いている。

この要因の一つとして、国内の経済状況の悪化が挙げられる。20 年の同国の GDP は、COVID-19 の影響によりマイナス 4.1% となった。このため、より安価な食肉である鶏肉に需要がシフトし、国内鶏肉価格の上昇につながったとしている。

図6 サンパウロ州の鶏肉卸売価格 (丸鶏・冷蔵) の推移



資料：サンパウロ大学農学部応用経済研究所 (CEPEA)

(調査情報部 井田 俊二)

牛乳・乳製品

米 国

バター、チーズなど高付加価値製品を中心に輸出が好調

9月も乳製品輸出は堅調に推移

米国農務省経済調査局(USDA/ERS)の「Dairy Data」によると、2021年9月の乳製品輸出は、港湾の混乱など物流面での課題があるにもかかわらず、世界的な需要の高まりを背景に、引き続き堅調に推移した(表)。米国を含めて世界的に乳製品価格が高くなっていること、また、バターやチーズといった付加価値の高い製品の輸出が増加していることで、輸出量、輸出額ともに高い水準となっている。

主な品目を見ると、チーズの輸出量は、3万4100トン(前年同月比19.9%増)と米国産チーズに対する世界的な需要を背景に大きく増加した。特に経済が回復傾向にあるメキシコ向けは堅調となった。メキシコへの輸出は、混乱する港湾を利用せず、トラック輸送が可能であることも増加を促している。米国乳製品輸出協会(USDEC)では、トラックや鉄道を利用した輸出は海上運賃と

比べて割高となるが、目的地に遅延なく輸送できるため信頼性が向上しているとしている。また、これにより輸出業者、輸入業者双方にとっても魅力が増すことで、他の市場に向けられる予定であった製品がメキシコ向けに転用されることにもつながっているとしている。

バターの輸出量は、3100トン(同107.0%増)と10カ月連続で前年同月を上回っている。ここ数年、米国産乳製品の主要輸出市場となっている中東や北アフリカ向けの輸出が増加していることも一因である。

一方、ホエイの輸出量は、5月が前年同月比30.0%増と大幅に増加したが、8月が前年同月比17.3%減とかなり減少したのに続き、9月は前年同月並と伸び悩んだ。これについてUSDECは、港湾の混乱があるほか、米国産ホエイの主要輸出先である中国向けが、同国の豚肉価格急落により飼養頭数が減少してきたことで、飼料用ホエイの需要が減少していることも一因と分析している。

表 主要乳製品輸出量の推移

(単位：千トン)

	2020年 9月	2021年 9月	前年同月比 (増減率)	2021年	前年同期比
				(1~9月)	(増減率)
脱脂粉乳	61.5	70.1	14.0%	691.6	12.5%
チーズ	28.4	34.1	19.9%	304.5	8.1%
乳糖	30.1	31.8	5.4%	292.5	0.3%
ホエイ	18.8	18.8	▲0.2%	174.0	11.4%
WPC	13.3	10.2	▲23.3%	105.6	1.1%
バター	1.5	3.1	107.0%	33.4	127.0%

資料：USDA「Daily Data」

注：製品重量ベース。

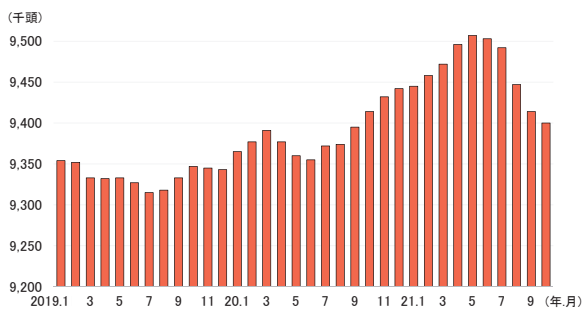
乳牛経産牛飼養頭数・生乳生産量とも前年同期比減

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）の「Milk Production」によると、2021年10月の乳用経産牛飼養頭数は前年同月比0.1%減の940万頭となった。飼養頭数は21年5月の950万7000頭をピークに5カ月連続で

減少しており、22カ月ぶりに前年同月を下回った（図1）。

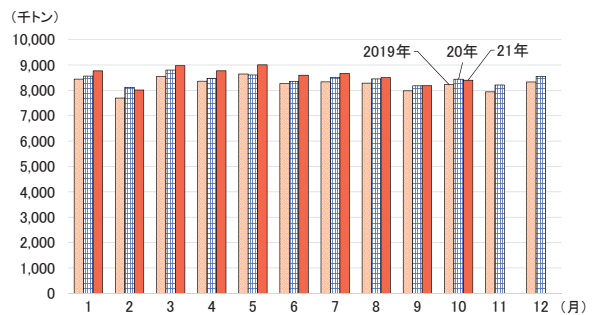
また、10月の生乳生産量は、同0.5%減の839万8000トンとなった（図2）。USDAは、ここ数カ月の間、乳価に比べて飼料、労働力、燃料などの投入コストが高いことが生乳生産の伸びに悪影響を及ぼしていると分析している。

図1 乳用経産牛飼養頭数の推移



資料：USDA/NASS「Milk Production」

図2 生乳生産量の推移



資料：USDA「Milk Production」

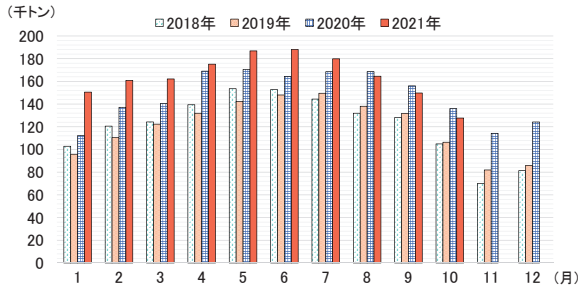
減少が続くバター在庫と潤沢なチーズ在庫

USDA/NASSの「Cold Storage」によると、2021年10月のバターの期末在庫量は12万7700トン（前年同月比6.1%減）となり、4カ月連続で減少した（図3）。現地報道によると、クリーム価格の高騰によりバター生産量が抑制されたことに加え、小売業者が12月のクリスマス休暇に備えてバター在庫を確保して

いることが要因とされている。

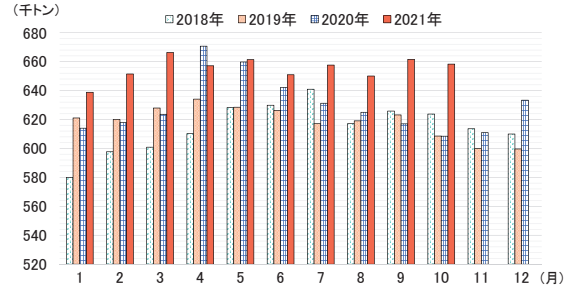
一方で、同月のチーズの期末在庫量は、65万8300トン（同8.2%増）と依然として高い水準にある（図4）。例年、チーズの在庫は夏の終わりから秋にかけて減少するが、今年はその傾向から変化している。現地報道によれば、国内外のチーズ需要は高いものの、それを上回る生産がされているとし、過剰な在庫が価格の下落にも影響を及ぼしているとされている。

図3 バター在庫量の推移



資料：USDA 「Cold Storage」
注：各月月末時点。

図4 チーズ在庫量の推移



資料：USDA 「Cold Storage」
注：各月月末時点。

(調査情報部 上村 照子)

E U

10月の生乳取引価格は、前年同月をかなりの程度上回る

9月の生乳出荷量、上位3カ国の減少により前年同月を下回る

欧州委員会によると、2021年9月の生乳出荷量（EU27カ国）は前年同月をわずかに下回る1138万4890トン（前年同月比0.5%減）となった（表）。

同月の出荷量を国別に見ると、イタリア（同5.7%増）、アイルランド（同7.4%増）、スペイン（同0.7%増）が前年同月を上回った一方で、主要生産国上位のドイツ（同2.4%減）、フランス（同2.4%減）、オランダ（同4.1%減）は、いずれも前年同月を下回った。

表 主要生産国別生乳出荷量の推移

(単位：千トン)

	2020年 9月	2021年 9月	前年同月比 (増減率)	2021年 (1~9月)	
				前年同期比 (増減率)	
ドイツ	2,582	2,519	▲ 2.4%	24,361	▲ 1.6%
フランス	1,872	1,827	▲ 2.4%	18,432	▲ 1.2%
オランダ	1,110	1,065	▲ 4.1%	10,335	▲ 2.1%
ポーランド	997	997	▲ 0.0%	9,511	0.3%
イタリア	932	984	▲ 5.7%	9,375	4.7%
アイルランド	747	802	▲ 7.4%	7,606	6.4%
スペイン	589	593	▲ 0.7%	5,656	0.6%
デンマーク	460	459	▲ 0.4%	4,270	▲ 0.3%
ベルギー	352	341	▲ 3.1%	3,331	▲ 0.7%
その他	1,797	1,798	0.0%	17,170	▲ 0.1%
合計	11,438	11,385	▲ 0.5%	110,047	0.0%

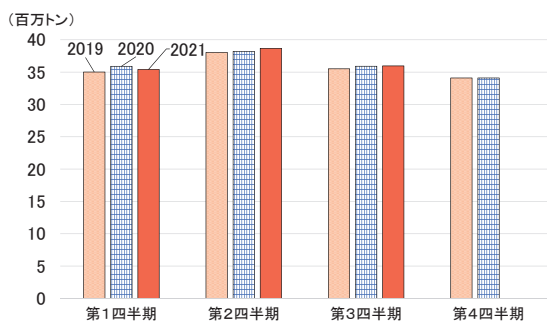
資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：速報値ベース。

注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

四半期ごとの推移を見ると、第1四半期は冬の寒波が例年以上に厳しかったことにより前年同期を下回ったものの、第2四半期は天候の回復から牧草の生育状況が良好だったこともあり、前年同期を上回った（図1）。また、第3四半期はEU南部が夏の高温・乾燥に見舞われたため、こうした地域では牧草の生育に影響が出たものの、主要生産国の多くで牧草の生育に適した天候が続いたことから前年同期並みを維持した。この結果、第1～3四半期の生乳出荷量は1億1005万トンと前年同期並みとなった。

図1 四半期ごとの生乳出荷量の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」

注1：速報値。

注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

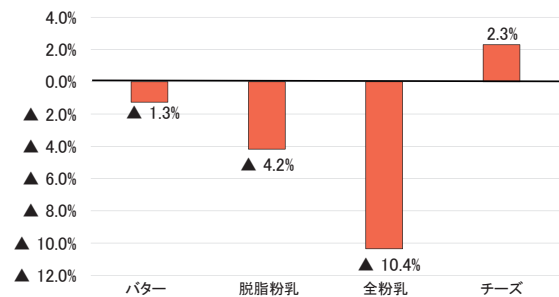
米国向け輸出増などから、チーズ生産量は前年同期を上回る

欧州委員会によると、2021年1～9月のEUの主要な乳製品の生産量は、チーズを除きいずれも前年同期を下回った（図2）。品目別に見ると、チーズは694万9610トン（前年同期比2.3%増）と前年同期を上回った。これは、航空機補助金をめぐる米国の追加関税措置が停止されたことで、米国向け輸出が大幅に増加したことに加え、中国向け輸出の拡大が生産量の増加につながったものとみられる（注1）。その他の主要乳製品で

は、チーズ向け生乳の仕向け割合が高かったことが影響し、バターは159万2424トン（同1.3%減）、脱脂粉乳は101万2260トン（同4.2%減）、全粉乳は44万7964トン（同10.4%減）と、いずれも前年同期を下回る結果となった。

（注1）海外情報「EUと米国、航空機補助金を巡る追加関税措置の停止を合意（EU）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_002968.html）を参照されたい。

図2 主要な乳製品生産量（2021年1～9月）の対前年増減率



資料：欧州委員会「Milk Market Observatory」

生乳取引価格は高い水準も、コスト上昇が懸念

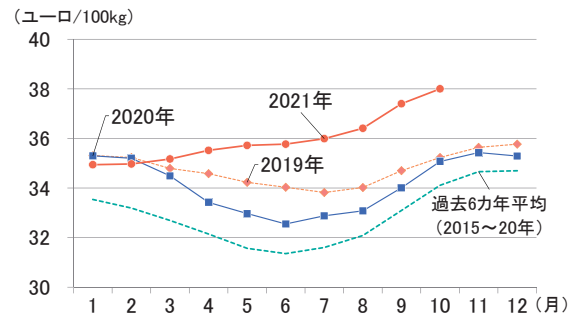
欧州委員会によると、10月のEUの平均生乳取引価格（推定値）は、100キログラム当たり38ユーロ（4937円、1ユーロ：129.91円（注2））と前年同月比8.4%高となった（図3）。例年、同価格は生乳出荷量が増加する夏場に下落し、生乳出荷量が減少する冬場に向けて上昇するという季節傾向があるが、2021年は、中国の輸入需要に伴う乳製品国際相場の上昇や乳製品価格が好調に推移していることもあり、夏場に下落することなく、上昇を続けている。

同価格は上昇を続けているものの、酪農経営に影響を及ぼす飼料価格やエネルギーコス

トは上昇している。直近の11月15日の週では、過去4週間の平均と比較して飼料価格は1.4%高、エネルギーコストは0.5%高となっている。同価格の上昇率に比べると、投入コストの上昇率は低い水準にあるものの、今後の生乳生産への影響が懸念される。

(注2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2021年11月末TTS相場。

図3 生乳取引価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」
 注1：直近月は推定値。
 注2：2019年以降はデータが未公表のルクセンブルグを除く。

(調査情報部 小林 智也)

N Z

乳製品国際価格は、主要4品目で上昇

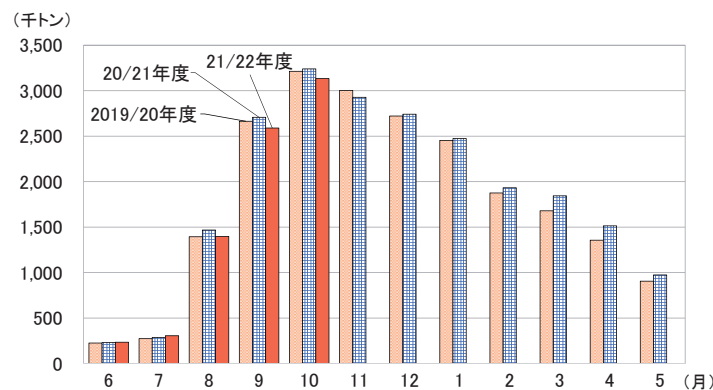
例年以上の降雨により、生乳生産量は3カ月連続減

ニュージーランド乳業協会(DCANZ)によると、2021年10月の生乳生産量は、313万3000トン(前年同月比3.3%減)とやや減少し、3カ月連続で前年同月を下回った(図1)。現地報道によると、例年に比べて降雨が多く、土壌の水分過多から牧草の生育に影響が生じたことで、生乳生産量

の減少につながったとされる。

また、今後の生乳生産量についてニュージーランド証券取引所(NZX)は、土壌の水分過多が11月の生乳生産を圧迫し、年内は前年同月割れが続く可能性があるとし、さらに、今後もラニーニャ現象による多雨により牧草の生育不順が続くことで、今シーズンの酪農生産はさらに厳しいものになると予測している。

図1 生乳生産量の推移



資料：DCANZ
 注：年度は6月～翌5月。

10月の乳製品輸出量、脱脂粉乳とチーズは前年同月比増

ニュージーランド統計局（Stats NZ）によると、2021年10月の乳製品輸出量は、脱脂粉乳とチーズが前年同月を上回ったものの、全粉乳とバターおよびバターオイルは前年同月を下回った（表1、図2）。

脱脂粉乳は、最大の輸出先である中国向けのほか、東南アジア向けも好調を維持し、全体ではかなり大きな増加となった。チーズは、主要輸出先である中国向けのほか、日本や韓

国、豪州向けが前年同月を大幅に上回ったことから、全体でも大幅に増加した。

一方、全粉乳は、中国向けが前年同月を大幅に上回った一方、東南アジアやアフリカ向けなどが落ち込んだことで、全体ではわずかに減少した。バターおよびバターオイルは、エジプト向けが第2位の輸出量になったほか、日本向けなども大幅に増加した。一方で、最大の輸出先である中国向けが前年同月を下回ったことで、全体ではかなり大きく減少した。

表1 乳製品輸出量の推移

（単位：トン）

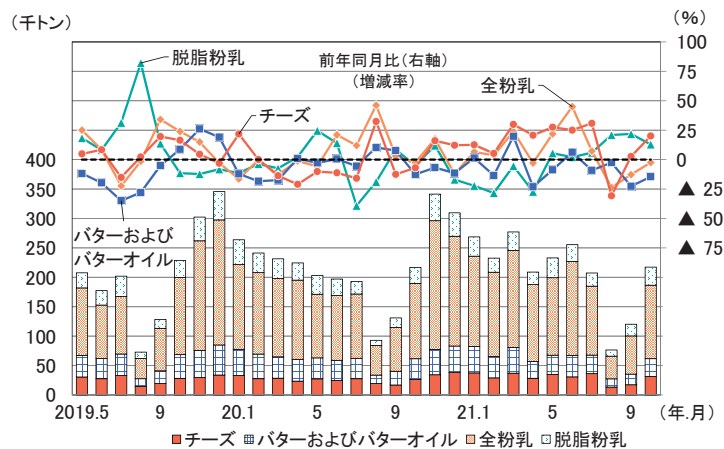
品目	2020年 10月	2021年 10月	前年同月比 (増減率)	2021/22年度 (7~10月)	
				前年同期比 (増減率)	
脱脂粉乳	27,177	30,678	12.9%	83,509	13.8%
全粉乳	128,027	124,845	▲ 2.5%	345,252	▲ 4.6%
バターおよび バターオイル	35,299	30,154	▲ 14.6%	93,770	▲ 13.0%
チーズ	26,288	31,561	20.1%	98,681	9.2%

資料：Stats NZ

注1：製品重量ベース。

注2：年度は7月~翌6月。

図2 乳製品輸出量および前年同月比（増減率）の推移



資料：Stats NZ

注：製品重量ベース。

GDT、チーズが2014年1月以来の5000ドル台

2021年11月16日に開催されたグローバルデイリートレード（GDT：月2回開催されるフォンテラ社主催の電子オークション。乳製品の国際価格の指標とされる）の1トン当たり平均取引価格は、主要4品目すべてで前回開催（同年11月2日）時より上昇した（表2、図3）。

品目別に見ると、脱脂粉乳は、北アジア^(注)、EU、中東からの需要にけん引され、1トン当たり3676米ドル（42万3000円、前回は1.4%高）と前回はわずかに上回っ

た。全粉乳は、東南アジアからの需要が落ち着く中で、北アジアからの旺盛な需要にけん引され、同3987米ドル（45万9000円、同1.7%高）と全体としてはわずかに上昇した。バターは、北アジアのほか中東や北米からの需要が強く、同5534米ドル（63万6000円、同3.4%高）と前回はやや上回った。チーズは、東南アジアを中心にアフリカ、中東からの需要にけん引され、同5162米ドル（59万4000円、同2.1%高）と、14年1月以来の5000ドル超えとなった。

（注）ニュージーランド外務貿易省は、中国、日本、香港、韓国、台湾を北アジアとしている。

表2 GDT乳製品取引価格（2021年11月16日開催）

（単位：米ドル/トン、万円/トン）

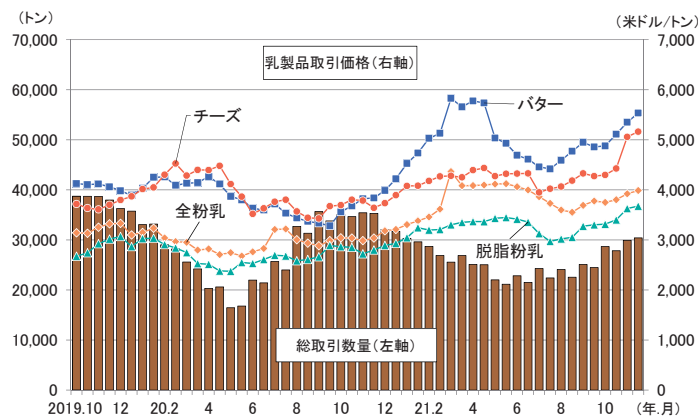
品目	価格		前年比 (騰落率)	前回比 (騰落率)
	米ドル	万円		
脱脂粉乳	3,676	42.3	31.3%	1.4%
全粉乳	3,987	45.9	31.3%	1.7%
バター	5,534	63.6	44.2%	3.4%
チーズ	5,162	59.4	41.8%	2.1%

資料：GDT

注1：1米ドル=115円（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月平均の為替相場」の2021年11月末TTS相場）として計算。

注2：前回は11月2日に開催。

図3 GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



資料：GDT

（調査情報部 廣田 李花子）

飼料穀物

世界

2021/22年度の世界のトウモロコシ期末在庫、19/20年度の水準に近づく

米国農務省世界農業観測ボード(USDA/WAOB)および米国農務省海外農業局(USDA/FAS)は2021年11月9日、2021/22年度の世界のトウモロコシ需給予測値を更新した(表)。

これによると、世界のトウモロコシ生産量は、12億462万トン(前年度比7.6%増、前月比0.5%増)と前月からわずかに増加すると見込まれている。国別に見ると、米国は単収の増加などにより110万トン、アルゼンチンは作付面積の増加などにより150万トン上方修正された。

輸出量は、世界全体で2億347万トン(同15.2%増、同0.8%増)と前月からわずかに増加すると見込まれている。国別に見ると、増産予測のアルゼンチンで100万ト

ン上方修正された。

輸入量は、世界全体で1億8342万トン(同2.2%減、同0.2%減)と前月並みが見込まれている。主要輸入国である中国は2600万トンと前月から変わらず、引き続き高水準が見込まれている。

消費量は、世界全体で11億9207万トン(同5.2%増、同0.5%増)と前月からわずかに増加すると見込まれている。国別に見ると、エタノール向けの需要が増加する米国で127万トン上方修正された。

期末在庫は、増産見込みを背景に前月から0.9%増の3億442万トン(同4.3%増)と19/20年度に近い水準が見込まれている。

表 主要国のトウモロコシの需給見通し（2021年11月9日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

国名	2019/20年度	2020/21年度 (推計値)	2021/22年度		
			(10月予測)	(11月予測)	前年度比 (増減率)
米国					
期首在庫	56.41	48.76	31.41	31.41	▲ 35.6%
生産量	345.96	358.45	381.49	382.59	6.7%
輸入量	1.06	0.62	0.64	0.64	3.2%
消費量	309.55	306.49	311.93	313.20	2.2%
輸出量	45.13	69.92	63.50	63.50	▲ 9.2%
期末在庫	48.76	31.41	38.10	37.94	20.8%
アルゼンチン					
期首在庫	2.37	3.62	2.12	1.62	▲ 55.2%
生産量	51.00	50.50	53.00	54.50	7.9%
輸入量	0.00	0.01	0.01	0.01	0.0%
消費量	13.50	14.00	14.50	14.50	3.6%
輸出量	36.25	38.50	38.00	39.00	1.3%
期末在庫	3.62	1.62	2.63	2.63	62.3%
ブラジル					
期首在庫	5.31	5.23	4.73	5.23	0.0%
生産量	102.00	86.00	118.00	118.00	37.2%
輸入量	1.65	3.50	1.70	1.70	▲ 51.4%
消費量	68.50	72.00	73.00	73.00	1.4%
輸出量	35.23	17.50	43.00	43.00	145.7%
期末在庫	5.23	5.23	8.43	8.93	70.7%
ウクライナ					
期首在庫	0.89	1.48	0.90	0.90	▲ 39.2%
生産量	35.89	30.30	38.00	38.00	25.4%
輸入量	0.03	0.02	0.02	0.02	0.0%
消費量	6.40	7.10	6.50	6.50	▲ 8.5%
輸出量	28.93	23.80	31.50	31.50	32.4%
期末在庫	1.48	0.90	0.91	0.91	1.1%
中国					
期首在庫	210.18	200.53	204.19	205.7	2.6%
生産量	260.78	260.67	273.00	273.00	4.7%
輸入量	7.58	29.51	26.00	26.00	▲ 11.9%
消費量	278.00	285.00	294.00	294.00	3.2%
輸出量	0.01	0.00	0.02	0.02	-
期末在庫	200.53	205.70	209.17	210.68	2.4%
世界計					
期首在庫	322.37	306.48	289.99	291.87	▲ 4.8%
生産量	1,119.68	1,119.02	1,198.22	1,204.62	7.6%
輸入量	167.76	187.60	183.85	183.42	▲ 2.2%
消費量	1,135.57	1,133.63	1,186.46	1,192.07	5.2%
輸出量	172.33	176.56	201.91	203.47	15.2%
期末在庫	306.48	291.87	301.74	304.42	4.3%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注：各国の穀物年度 世界、米国：9月～翌8月/中国、ウクライナ：10月～翌9月/アルゼンチン、ブラジル：3月～翌2月。

（調査情報部 水野 崇）

2021/22年度は記録的な生産で大豆期末在庫も高水準

米国農務省世界農業観測ボード(USDA/WAOB)および米国農務省海外農業局(USDA/FAS)は2021年11月9日、2021/22年度の世界の大豆需給予測値を更新した。

これによると、世界の大豆生産量は3億8401万トン(前年度比4.9%増)と前月から113万トン下方修正されたが、前年度を上回る記録的な生産が見込まれている(表)。最大の生産国であるブラジルは引き続き過去最大とされているほか、米国は前月から単収の下方修正(0.3ブッシェル減の1エーカー当たり51.2ブッシェル)、また、アルゼンチンは同じく収穫面積の下方修正が行われたが、いずれも生産は前年度を上回ると見込まれている。

輸出量は、世界全体で1億7209万トン(同4.4%増)と前月から99万トン下方修正された。最大の輸出国であるブラジルは、作付面積の拡大などに伴う生産増を要因に9400万トン(同15.1%増)と前年度

をかなり大きく上回る一方、米国は、繰越在庫が少ないことなどから5579万トン(同9.5%減)と前年度をかなりの程度下回ると見込まれている。

輸入量は、世界全体で1億6978万トン(同2.1%増)と前月から84万トン下方修正された。最大の輸入国である中国は、米国とアルゼンチンの輸出量が下方修正されたことを受けて1億トン(同0.2%増)と前月から100万トン下方修正された。

消費量(搾油仕向け)は、世界全体で3億2882万トン(同4.0%増)と前月から43万トン上方修正されたが、最大の消費国である中国は、前月から変わらず前年度をやや上回る9800万トンと見込まれている。

この結果、引き続き世界の生産量が消費量を上回っていることで、期末在庫は1億378万トン(同3.7%増)と前月から79万トン下方修正されたものの、前年度に続き1億トンを上回ると見込まれている。

表 主要国の大豆需給見通し（2021年11月9日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

国名	2019/20年度	2020/21年度 (推計値)	2021/22年度		
			(10月予測)	(11月予測)	前年度比 (増減率)
米国					
期首在庫	24.74	14.28	6.97	6.97	▲ 51.2%
生産量	96.67	114.75	121.06	120.43	4.9%
輸入量	0.42	0.54	0.41	0.41	▲ 24.1%
消費量	58.91	58.26	59.60	59.60	2.3%
輸出量	45.70	61.66	56.88	55.79	▲ 9.5%
期末在庫	14.28	6.97	8.71	9.25	32.7%
ブラジル					
期首在庫	32.47	20.00	26.95	27.95	39.8%
生産量	128.50	138.00	144.00	144.00	4.3%
輸入量	0.55	1.02	0.65	0.65	▲ 36.3%
消費量	46.74	46.75	47.70	47.70	2.0%
輸出量	92.14	81.65	93.00	94.00	15.1%
期末在庫	20.00	27.95	28.25	28.25	1.1%
アルゼンチン					
期首在庫	28.89	26.65	25.75	25.06	▲ 6.0%
生産量	48.80	46.20	51.00	49.50	7.1%
輸入量	4.88	4.82	4.70	4.80	▲ 0.4%
消費量	38.77	40.16	42.00	42.00	4.6%
輸出量	10.00	5.19	6.35	5.35	3.1%
期末在庫	26.65	25.06	25.70	24.61	▲ 1.8%
中国					
期首在庫	19.46	26.80	33.72	34.49	28.7%
生産量	18.10	19.60	19.00	19.00	▲ 3.1%
輸入量	98.53	99.76	101.00	100.00	0.2%
消費量	91.50	93.00	98.00	98.00	5.4%
輸出量	0.09	0.07	0.10	0.10	42.9%
期末在庫	26.80	34.49	35.92	35.69	3.5%
世界計					
期首在庫	114.10	95.49	99.16	100.11	4.8%
生産量	339.89	366.23	385.14	384.01	4.9%
輸入量	164.97	166.24	170.62	169.78	2.1%
消費量	312.48	316.04	328.39	328.82	4.0%
輸出量	165.06	164.80	173.08	172.09	4.4%
期末在庫	95.49	100.11	104.57	103.78	3.7%

資料：USDA

注1：各国の穀物年度 米国：9月～翌8月/ブラジル、アルゼンチン、中国：10月～翌9月。

注2：消費量は搾油仕向量である。

（調査情報部 横田 徹）

米 国

2021/22年度の米国トウモロコシ生産量、前月比で増加見込み

USDA/WAOBは2021年11月9日、2021/22年度（9月～翌8月）の米国の主要農作物需給予測値を更新した。このうち、同国のトウモロコシ需給見通しは次の通りである（表）。

表 米国のトウモロコシの需給見通し（2021年11月9日米国農務省公表）

区分	－単位－	2019/20年度	2020/21年度 (推計値)	2021/22年度			
				(10月予測)	(11月予測)	参考（換算値）	前年度比 (増減率)
作付面積	(百万エーカー)	89.7	90.7	93.3	93.3	37.8 (百万ヘクタール)	2.9%
収穫面積	(百万エーカー)	81.3	82.3	85.1	85.1	34.4 (百万ヘクタール)	3.4%
単収	(ブッシェル/エーカー)	167.5	171.4	176.5	177.0	11.1 (トン/ヘクタール)	3.3%
生産量	(百万ブッシェル)	13,620	14,111	15,019	15,062	382.59 (百万トン)	6.7%
輸入量	(百万ブッシェル)	42	24	25	25	0.64 (百万トン)	4.2%
期首在庫	(百万ブッシェル)	2,221	1,919	1,236	1,236	31.40 (百万トン)	▲35.6%
総供給量	(百万ブッシェル)	15,883	16,055	16,280	16,323	414.62 (百万トン)	1.7%
国内消費量	(百万ブッシェル)	12,186	12,066	12,280	12,330	313.19 (百万トン)	2.2%
飼料など向け	(百万ブッシェル)	5,900	5,601	5,650	5,650	143.52 (百万トン)	0.9%
食品・種子・その他工業向け	(百万ブッシェル)	6,286	6,465	6,630	6,680	169.68 (百万トン)	3.3%
うちエタノール向け	(百万ブッシェル)	4,857	5,028	5,200	5,250	133.36 (百万トン)	4.4%
輸出量	(百万ブッシェル)	1,777	2,753	2,500	2,500	63.50 (百万トン)	▲9.2%
総消費量	(百万ブッシェル)	13,963	14,819	14,780	14,830	376.70 (百万トン)	0.1%
期末在庫	(百万ブッシェル)	1,919	1,236	1,500	1,493	37.92 (百万トン)	20.8%
期末在庫率	(%)	13.7	8.3	10.149	10.067		1.8ポイント増
生産者平均販売価格	(米ドル/ブッシェル)	3.56	4.53	5.45	5.45	24.7 (円/kg)	20.3%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

注1：年度は各年9月～翌8月。

注2：1エーカーは約0.4047ヘクタール。

生産量は、単収の上方修正を受けて、150億6200万ブッシェル（3億8259万トン^注、前年度比6.7%増、前月比0.3%増）と見込まれている。前年度からかなりの程度増加する見込みであり、これまでの統計で最も生産量の多かった16/17年度の151億4800万ブッシェル（3億8477万トン）に近い水準となっている。

消費量は、エタノール向けが前月から5000万ブッシェル上方修正されたことから、全体では123億3000万ブッシェル（3億1319万トン、同2.2%増、同

0.4%増）とわずかに上方修正された。

輸出量は、アルゼンチンやEUなどの主産国で輸出量の上方修正があるものの、25億ブッシェル（6350万トン、同9.2%減、前月同）と前月並みとされ、依然として記録的な輸出量となった前年度からかなりの程度の減少が見込まれている。

期末在庫は、14億8300万ブッシェル（3792万トン、同20.8%増、同0.5%減）と前月からわずかに下方修正された結果、期末在庫率（総消費量に対する期末在庫量）は10.1%（同1.8ポイント増、前月並み）と前月から引き続き10%台を保った。

また、生産者平均販売価格は、前月と同じ1ブッシェル当たり5.45米ドル（627円。1キログラム当たり24.7円）と据え置かれている。

（注）1ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。

（調査情報部 水野 崇）

中国

トウモロコシ、供給増から国内価格は続落

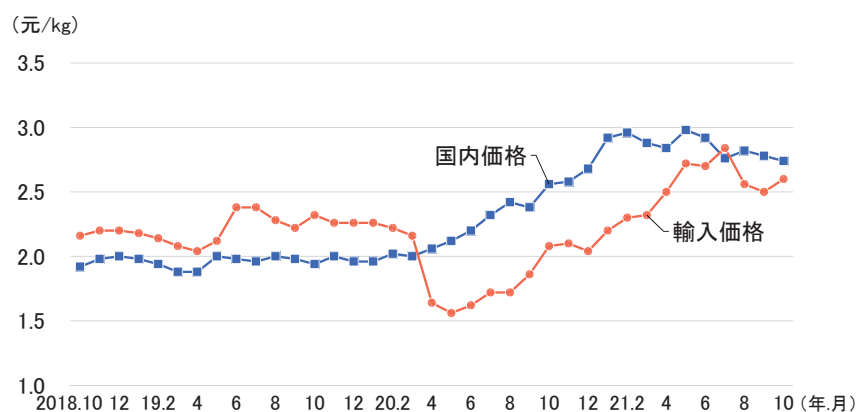
中国農業農村部は11月19日、「農産物需給動向分析月報（2021年10月）」を公表した。この中で2021年のトウモロコシの国内価格について、順調に収穫が続く中で下落基調にあるとしている（図）。

価格下落の要因として、収穫を終えたトウモロコシが国内市場に出回る中で、旧穀や貯蔵されていた輸入トウモロコシが積極的に出荷される一方、国内での電力の供給制限による工業向け需要の低下から、全体的に需給バランスが緩んでいることを挙げている。

主要養豚生産地である中国南部向け飼料原

料集積地となる広東省黄埔港到着の輸入トウモロコシ価格（関税割当数量内：1%の関税＋25%の追加関税）は、10月が1キログラム当たり2.60元（47円：1元＝18.13円^注）と反転したことで、国産のトウモロコシ価格（東北部産の同港到着価格）に比べ同0.14元（3円）安と前月より価格差が縮まっている。一方、関税割当数量を超えた同トウモロコシ価格（65%の関税＋25%の追加関税）は同4.18元（76円）となり、国産に比べ同1.44元（26円）高く前月より価格差が広がった。

図 トウモロコシ価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成

注1：国内価格は、中国東北部から広東省黄埔港までの運賃込み2級黄トウモロコシ価格。

注2：輸入価格は、米国メキシコ湾積出し2級黄トウモロコシの広東省黄埔港引渡し価格（関税割当数量内：課税後）。

（調査情報部 横田 徹）

国産大豆価格は若干の上昇

2021年の大豆の生産状況については、9月に南部での収穫が終了し、10月に入り主産地である東北部での収穫が終盤を迎えているが、全体的には前年を上回るとみられている。一方で、国産の大豆価格は、生産増から短期的には下落傾向との予測も出ていたが、農家からの出荷が減少してきたことで、若干の上昇を見せている(図)。

大豆主産地の一つである東北部の黒竜江省の搾油用向け大豆平均取引価格は、10月が1キログラム当たり4.88元(88円、前年同月比15.7%高)、同じく食用向け同価格は同5.84元(106円、同27.3%高)と前年に比べて高い水準にある。また、大豆の国内指標価格の一つとなる山東省の国産大豆価格は、同6.14元(111円、同15.0%高)と同じく高い水準にある。

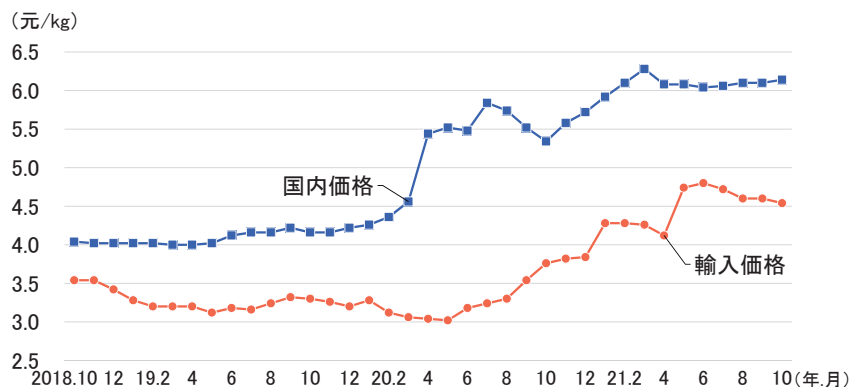
国産大豆価格の上昇を受けて、下落基調にある輸入大豆との価格差は10月が1キログラム当たり1.60元(29円)と前月より

わずかに広がった。今後の見通しについて同分析月報では、国産の供給量が減少する中で、積極的な買い付けが行われていることから、国産大豆価格は引き続き高水準で推移するとしている。

このような中で、中国の大豆輸入量は引き続き高い水準にある。21年1~9月の大豆輸入量は7399万トン(前年同期比0.7%減)と前年並みを維持しており、同輸入額も穀物価格の上昇を反映し前年同期比39.4%増の401億米ドル(4兆6023億円:1米ドル=114.77円^(注))と報告されている。主な輸入先は、ブラジル(輸入量の66.2%)、米国(同29.5%)、アルゼンチン(同2.0%)となった。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2021年11月末日TTS相場。

図 大豆価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成
 注1：国内価格は、山東省入荷価格。
 注2：輸入価格は、山東省青島港引渡し価格(課税後)。

(調査情報部 横田 徹)